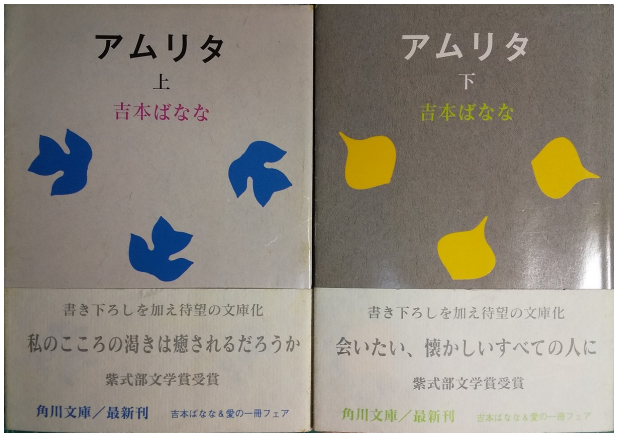
走り読み文学探訪リバイバル(その20)

「アムリタ」

著者:吉本ばなな

角川文庫(上下各560円,1997年)　　紹介者:榎本博康

[紹介]



作家業の端くれの竜一郎から、大きなビクターの犬が送られて来た。彼は自殺した妹の恋人であった。

そして私(主人公)は頭を打って記憶を失った。全く忘れてしまった分けではないが、今が過去の続きであることに確信が持てない。自分探しが始まる。

二度結婚している母、父の違う小学生の弟、いとこの女性、そして母の友人、つまり居候という奇妙な家族、または同居者達。

突然、弟が不思議な力に目覚め、ＵＦＯを見たり、空間移動をしたりする。学校で普通にやっていけなくなった弟を連れて高知に一週間滞在する。さらに、私自身の必要もあって、一ヶ月程サイパンに連れて行く。そして弟は都内にある、学校に行けなくなった子供達の合宿施設に入るが、何か不思議な力で他の子供達を引きつけてしまう。

私は妹の恋人であった竜一郎との恋を始めた。自分探しの間にも、記憶喪失の間にも様々な変化があり、そしてちょっとしたきっかけで、記憶を取り戻す。弟は中学に入ると急速に普通の子供になっていった。一回きりのいとおしい時間が、慈雨の如くに降り注ぐ。神が飲む水、アムリタ。

[感想]

アムリタは頭の話である。主人公は頭を打って記憶を失い、自分探しに常に頭の中の回路を空しく活動させている。個々の記憶はあるのだが、関連づけの回路が切れてしまい、記憶に現実感が伴わない。弟は成長の過程で妙に感受性が発達して、見えないもの達との交流を深める。ＵＦＯが見えれば、空間移動さえもしてしまう。とても頭の中が熱くなっている。主人公もそれに交感して頭が熱い。

旅をして、そして作家をやっている竜一郎が言う。

「由男(主人公の弟の名前)とか俺みたいに、変なふうに頭を使ってしまって脳の筋肉が発達しすぎているやつは、体の言葉を聞いてやらないと、分離しちゃってひどいことになるんだ。」「俺なんか頭を使うのが職業だから、いつもその調整が大変なんだ。でも、考えちゃだめなんだ。極端な話、走るとか、泳ぐとか、そういうものでもいいくらいだ。今したいことにためらいなく足が動くように調整しとかないと、頭の筋肉が熱を持って、オーバーヒートしちゃう。休めなくなるんだ。」

そう、頭が焼き切れないように、やむを得ず走ることもある。前に取り上げたシッダルタもこのように走り、そして疲れて止まったときに自己の再統一を図ったのだ。走りには確かにこのような働きがあると思う。

さて、その昔にばななの父の吉本隆明の「詩的乾坤」(してきけんこん)や「言語にとって美とは何か」などの文芸評論を、分からない部分が多いにもかかわらず、力ずくで読んだことがあった。今はそれらのどこに書いてあったか思い出せないが、読んでいて驚いた。評論の過程で作者の感情が書くべき言葉を追いこしてしまうと、「馬鹿は死ね」というのだ。学校教育でそんなことは思っても言う

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

ものではないと教わってきた身には、実に新鮮であった。このレトリックのかけらもない罵倒も、今思うとアムリタでの頭が熱くなりすぎたら走れというのと、同根のものかも知れない。つまり書くべき言葉よりも頭脳が熱くなりすぎると、罵倒してしまうのだ。

その娘のばななが作家になったというので気になった。デビュー作「キッチン」は、アメリカを代表する女流作家、マッカラーズの「夏の黄昏」(The Member of the Wedding)を彷彿とさせた。つまりストーリーがキッチンでの会話を軸に進行するという、女流ならではの手法にである。その感をアムリタで一層強くした。「夏の黄昏」では主人公は十二歳の少女、料理人の中年女、従兄弟で六歳の少年という、家族と呼ぶにはばらばらの人間達がキッチンに集まって会話をする。人々は心と体の傷または奇形を抱きながら、他者とのつながりを渇望する。

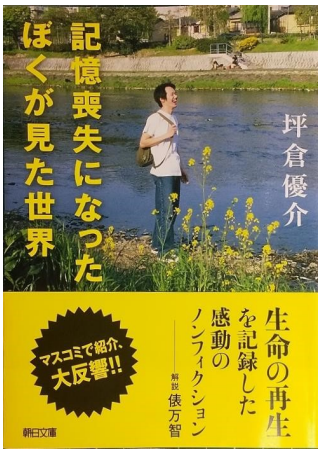
ところで、主人公らがサイパンで、現地で暮らす日本人の若い夫婦に会う。この女性が歌うと、昔戦争で死んだ霊達がざわめき、この世ではない世界が、裂け目の向こうに、見える人には見える。そうでない人でも歌の上手下手を越えた、とうてい言葉では表し得ない深い感動を得るという。以来、この歌声が私の頭の中を熱く満たしている。この歌を頭の中で聞き続けると、肉体を使うことなく走れる気がしてくるからだ。

(初稿1998.11.15)

[リバイバル感想]

「頭が焼き切れないように、やむを得ず走ることもある」かあ。20年以上前の自分が、この言葉に共感を得ていたことがいとおしい。ぎゅっとしてあげよう。漠然としていながらも止むに止まれぬ強い衝動にかられて、頭の中のシナプスを発熱させながら伸ばし、未知なるニューラル・ネットワークを猛烈なスピードで形成しては破壊し、自分だけの小宇宙を創造していく、そんな時代を未だかすかにでも記憶していた頃だ。

気づかされたのだが、最近は既に構築された脳内を検索しているだけのような気がする。しかもその構築物が日々風化しているという残念な状態だ。いろいろな事態に直面した場合に、時間的・空間的にそれ以降の全体を見渡せてしまうような気がするのだが、それはその新たな事態のディテイルを削いで、自分が知っている事態の入り口の形に合わせているに過ぎない。つまり何も見ていないのだ。未経験のディテイルをこそ拾って、そのおさまり場所を求めてシナプスを伸ばす。0.1℃でも良いから発熱をしたい。そしてその冷却を兼ねて走りたい。



ところで、丁度坪倉優介氏の「記憶喪失になったぼくが見た世界」、朝日文庫(2019)を読んだ。それはよく見る娯楽ドラマでの記憶喪失では絶対に描かない、恐ろしい世界であり、そこからの復活の物語だ。大学生である氏は、日本語の文法は覚えているが、親を含めて誰も記憶になく、何も認識できず、物の名前を知らず、簡単な道具の使い方も知らない。過去の自分との連続性が全くと言って良いほどに断たれていた。新たに獲得した記憶をとどめるためにひらがなを習う。

今は深夜。シナプスをたたき起こして発熱するぞ。

(2020.7.30)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.